

# ファン・ゴッホと日本

## —ガシェ芳名録紹介本をめぐって—

### 【趣旨】

## ロール・シュワルツ＝アレナレス\*

### I. 「ファン・ゴッホと日本」の再考

ゴッホと日本の関係は、美術史、特にジャポニズム研究において、以前からすでに研究対象として注目され、西洋や日本で多くの研究や刺激に満ちた展覧会が行われてきた。ゴッホの作品における浮世絵の役割、あるいは、ごく一部ではあるが、白樺派の代表格らにみられるような日本におけるゴッホの解釈といったテーマは、比較的活発に議論される問題となっている。

では今日、このテーマについて取って何を問うことができるだろうか。本セッションの根本にある意義と方向性、そして期待できる成果について考えたい。

まず、本テーマを選んだ理由の一つとして、複雑で奥の深いこのテーマを、比較日本学教育研究センターの目的と活動に即して取り上げたいとの思いがあった。ゴッホと日本の関係という問題は、芸術家とその作品の国境を越えた普及と影響力について、歴史、美術史、文学、美学、そして日本学といった学問領域とそれぞれの研究方法から検討させるものであるが、実際これは、世界における日本文化の受容と研究、そして交流の多様性を、比較的研究、歴史的研究、学際的研究といった角度から分析することを使命とする本センターの取り組むべき問題といえる。ゴッホ作品における日本美術と日本思想の影響のみならず、20世紀を通してゴッホが日本の多くのクリエイター

や思想家の作品、精神性、さらにはアイデンティティに浸透していった経緯に着目することで、異国間、異領域間の相互作用というものについて掘り下げ、また、日本と西洋の資料をもとに、こうした行き来や結びつきを突き動かした歴史的状況と、異文化に対する芸術的、精神的、あるいは宗教的憧れについて問うことになる。

次に、セッションのサブタイトルが示す通り、ガシェ家の芳名録という極めて意義深い資料をもとに、このテーマを再考したいとの思いがあった。このガシェ芳名録は、尾本圭子氏の近著 *Van Gogh, pèlerinages japonais à Auvers* (『ゴッホ終焉の地オーヴェールと日本からの巡礼者たち』) のフランスでの出版を機に紹介された。ゴッホやその他多くの芸術家の作品のコレクターとして知られる医師ガシェの息子により、ギメ美術館に寄贈されたガシェ家芳名録全3冊は、1980年代に展覧会などで僅かながら取り上げられることはあったが、2009年に尾本氏の著書が出版されるまではほとんど無名の存在であった。午前中の公開講演で、その綿密で根気強い研究の経緯と成果を発表して下さった尾本圭子氏は、30年近くにわたりギメ美術館附属図書館日本コレクションの責任者を務めてこられた。本書で尾本氏はガシェ芳名録の内容を紹介し、1922年から1939年の間にオーヴェール・シュール・オワーズにある医師ガシェの家に、ゴッホへのオマージュとして訪れた250名近い日本人アーティスト、美術評論家、学者や愛好家の署名と様々なテキストについて、初めて詳細に解説している。今年の春、第1回小林

\*お茶の水女子大学大学院准教授

宏記念日仏図書館情報学会賞を受賞した本書は、日仏芸術交流を解明する研究ツールとしてのこの資料の重要性を明らかにし、日本におけるファン・ゴッホ受容の歴史に、新たな研究の道を切り開いたといえる。

本セッションはしたがって、尾本氏の貴重な研究が発表されたことを機に、その延長として、ゴッホと日本の多様で持続的な関係性について、様々な角度から再検討しようという思いから生まれたものである。1990年代初めより、美術史、社会学、思想、文学の分野で見られるようになった、学問領域の垣根を取り払い、作者の概念、芸術的相互作用や芸術的コンテキストの問題を再定義しようという新たな方向性と方法論、そしてジャポニズム研究の発展と日本学の進展に照らし合わせると、ガシェ芳名録は、その分析に非常に適した時期に再発見されたと言えるのではないだろうか。いずれにせよ、多様で独創性に富んだ本セッションの研究発表は、ゴッホと日本というテーマへの新しいアプローチの試みに応えるものであった。ゴッホの作品と日本での受容についての研究で知られる近代芸術思想史家の木下長宏氏と、西洋美術史家である圀府寺司氏、日本近代絵画史を専門とし、日本人芸術家と西洋美術との関係分析に取り組んでこられた田中淳氏、そして日本の美術、文学、思想を、比較研究的視点から文化交流史の中に捉え直して解釈するという幅広い考察を展開されている稲賀繁美氏といった研究者の方々に、その貴重な研究成果を発表していただいた。

## II. 巡礼

次に、本セッションの主な方向性と構成についてであるが、それぞれの研究発表を互いに結びつけ得る一つの考えがあるとすれば、それは尾本氏の著書のタイトルにも現れる「巡礼」(pèlerinage)ではないだろうか。ガシェ芳名録に名を連ねる里見勝蔵が、ゴッホのお墓で向日葵の種を拾い、日

本でゴッホを敬愛する人たちに配ったという話に触れながら尾本氏も序章で述べているように、この「巡礼」という言葉が日本語の「お墓参り」を直接指し示す言葉であるにせよ、ある芸術、あるいは芸術家に出会うための精神的な旅として理解されるにせよ、この言葉に結びつく「交わり(コミュニケーション)」や移動という考え方から、本セッションのテーマの複雑さを均一な光で照らしてくれる言葉ではないだろうか。

ガシェ芳名録第3巻目の日本人「巡礼者」の署名が刻まれた1937年は、万国博覧会でスペイン館の「ゲルニカ」と、ドイツ館のアルノ・ブレーカーによるアーリア的理想を追求した彫刻が対峙した年であった。こうした国際社会の中、ゴッホに捧げられた大規模な回顧展がパリで開催され、同年6月にフィガロ紙に掲載された「トーキョー河岸の新宮殿とミュゼオグラフィ― ファン・ゴッホに」と題する記事の中で、記者のレイモン・レキュイエールはこの高い教育的目的をもった展覧会を、次のように称賛している。

「フィンセント・ファン・ゴッホの回顧展では、画家の重要な作品を集めることだけに甘んじず、ゴッホという人間を知り、この芸術家を理解するに最も適した資料も集められた。書簡から浮かび上がる貧しいゴッホの肖像、彼が不安な生活を送った場所の図、彼が描いたモチーフの写真、これらすべてが、我々の目の前に、暗示に満ちた順序で展示されていた。

(中略)

ここに集まった絵画やデッサンの質の高さは、いくら強調してもしすぎることはない。その多くがパリで初めて公開されたものである。制作にかけた短くドラマチックな年月の中で、フィンセントは時に彼自身より劣り、時に勝った。我々は、彼の高ぶった印象主義が、常軌を逸したロマン主義と結合する時のゴッホを好むべきだろうか。それとも無意識の借用という力に支配され、過度に

作品を日本的にしている時だろうか。あるいは内なる不安をコントロールし、制作の合間に安定と力強さを取り戻している時だろうか。筆者としては、彼が神経の混乱を制御した時、光に満ち溢れ、静かで力強いクロー平野の風景を描いている時、トランクタイユの眺めやアルピーユ山脈の荒々しい岩をスケッチしている時のゴッホにとりわけ感嘆の念を抱く。こうした作品において、ファン・ゴッホは最も偉大な画家にひけをとらなかった。]

この記事が示すように、ヨーロッパでも、また日本でも、時代や国境を越えて画家への親近感を引き起こし、あるいは呼び覚まし、そしてゴッホの受容の歴史に刻まれるほとんど狂信的といってもいいゴッホの引力ともいえるべきこうした巡礼への情熱をかき立ててきたのは、ゴッホの絵画そのものであると同時に、あるいはそれ以上に、ゴッホ自身であり、彼の人生、書簡、宗教的で普遍的なものへの熱望、そしてゴッホゆかりの「聖地」であった。天分、孤独、苦難、貧困、無理解といったモチーフの上に築かれた「殉教者」、「世俗の聖人」という伝説が作り上げられた原因について、フランス人研究者ナタリー・エニックは著書*La Gloire de Van Gogh. Essai d'anthropologie de l'admiration* (1992) (『ゴッホはなぜゴッホになったか—芸術の社会学的考察』三浦 篤訳、2005年、藤原書店)の中で、ゴッホは、芸術思潮を超え、20世紀全体にとって、芸術家の新しいモデル、「近代的芸術家」、「作品創作の秀逸さを量る技術的基準に、人生における秀逸さを量る倫理的基準を重ねた」芸術家を体現したと考察している。

ゴッホの芸術が日本へもたらされて以来、白樺派の同人らによってしばしば「自己主張」と考えられたゴッホの型破りな人格への敬愛、画家が描いたアルル地方の風景に見出され、旅や日本独自の世界観である「見立て」を通して今日に記憶される日本人のユートピア、そしてゴッホの人間主義的な信念や、絵画技法の選択にも見出される彼

の日本への称揚といったことは、本セッションで、比較的研究、学際的研究という観点から議論できるテーマであったと言える。

日本におけるゴッホの受容という問題を取り上げる前に、ゴッホの作品における日本の存在という重要な問題に着目したい。冒頭に述べたように、このテーマについてはすでに多くの研究がなされているが、木下氏が提案されるアプローチと分析方法はとりわけ、形式的・様式的な借用の厳密な分析を超え、日本から影響を受けた絵画技法の使用と応用の意義そのものについての理由を問うもので、こうした感化作用の中身を再考し、ゴッホが考えたように日本の技法が持つ精神性や技法を認識させてくれるものである。ゴッホの書簡に度々ほめかされる日本との関係性には実際、とりわけ自然描写における日本の芸術家の表現の品性、力強さ、誠実さに対してゴッホが抱いた感嘆の念を強く感じさせられる。浮世絵の絵師らの精神的、さらには宗教的奥深さへのこうした評価に、著名な西洋美術史家で銅版画家を父にもつアンリ・フォシヨンの、江戸の浮世絵に対する鋭い洞察力に満ちた視線が思い出される。1921年に出版された著書『仏教美術』(*L'Art bouddhique*)の中で、フォシヨンは浮世絵に次のような賛辞を送っている。

「浮世絵は、その技法の甘美な精神性、線の純粹さ、陰影のない、重力から解放されたフォルムが永遠の光の中でゆったりと展開していくかのような無限の空間の詩学によって、仏教的なのである。浮世絵は、女性的感性の抗い難い気品、アジャンター石窟の壁画のごとく、歌麿の浮世絵の上に輝く阿弥陀如来の永遠の微笑によって、仏教的なのである。」

このように、浮世絵の宗教性を強調しながら、絵画的意図とその実践の一致に価値を与えるために、時として余りに堅固な様式研究と図像学的

研究の間の垣根を打破し、そして芸術の伝承と感化作用の問題を提起しながら、『かたちの生命』(Vie des Formes) や『手を讀んで』(L'éloge de la Main) の著者が追究したアプローチは、今回のシンポジウムで検討されるべき多くの問題を提起しているように思われる。

ゴッホが、北斎や広重の浮世絵を通して、日本の思想や、日本人のこうした自然への共感力を理想化したのと同様に、日本人の芸術家、思想家、作家は、ゴッホの作品の中に認められる、西洋人芸術家のものの見方、人格、人生、そしてその向こうにある近代的な芸術創造の理想と探究のシンボル、あるいはモデルを追い求めた。こうした相互への憧れ、豊かでダイナミックな感化作用、さらにはアジアにおけるゴッホの受容形態という問題を直接的に問う、この画家と日本の神秘的な交わりについて、本セッションでは歴史的、今日的、そして比較研究的視点から取り上げようと考えた。

①歴史的視点として、田中淳氏に、明治期の終わり頃、主に1912年代に見られたゴッホの複製図版と、萬鉄五郎、中川一政という二人の画家、思想家・柳宋悦の言説を通して、日本におけるゴッホ受容の最初の背景についてお話しいただいた。この中で、ゴッホとその作品は、西洋との多様な接触と、文芸雑誌『スバル』や『白樺』、あるいは「フェウザン会」といった文芸グループ・雑誌の創設とその活動に証明される、ヨーロッパからの情報の普及の加速といった観点から捉え直された。とりわけ『白樺』の掲載論文の中に見られるような西洋の芸術文化の理解と伝達、応用への努力を評価しながら、日本におけるゴッホの発見が、前例のない文献調査の作業と、民藝運動の新しい考え方に培われた美術史学の方法論的革新、他者へのこうした開かれた意識、そして文学と芸術、テキストとイメージ、作家と芸術家の間の緊密な対話を伴うものであったことが明らかになった。

②今日的視点として、圀府寺司氏は、ゴッホと兵庫、とりわけ画家・大石輝一との関係という非常に示唆に富む具体例を挙げながら、20世紀後半のゴッホ作品と思想の日本への伝来について考察された。兵庫県三田市に広がる田園地帯に存在する「日本のアルル」に、大石は1960年代、ゴッホへの敬愛の印として「ART GARDEN」というモニュメントを作ったが、ここに土地と風景の記憶という重要かつ複雑な問題が提起される。現実に存在し、あるいは絵として描かれ、人が生き、移し替えられ、理想として追い求められ、愛された土地という、その多様な性質、あるいはさらに機能の問題、そして目下の保存問題について圀府寺氏にお話しいただいた。一つの巡礼の地を通して、ある芸術家、ある時代、そしてある文化的、国際的な絆が遺したユートピアを、「聖人伝」を、どのように生かし、伝えていくのが焦点となった。

③比較研究的視点としては、稲賀繁美氏が文学と絵画という二つの分野、宮澤賢治とフィンセント・ファン・ゴッホという二人の人間を、それぞれの人生、作品、思想を通して比較対照した。宮澤賢治の作品に見られるゴッホの影響についての議論を超え、芸術的創造、宗教、自然と宇宙における命の捉え方といったものに対する、この二人の人間に認められる驚くべき一致点を裏付けるような、個人的かつ文化的な制作の源泉と背景の内容そのものについて、稲賀氏は刺激に満ちた比較を通して分析してみせた。そして、二人の制作過程と精神の歩みを対照させながら、日本におけるゴッホの位置づけや意義という問題のみならず、こうした受容がいかにして中国へ伝播したか検討しながら、アジアのモダニズムの確立におけるゴッホの存在とその役割について考察した。

### Ⅲ. 作品とその受容のダイナミズム

最後にゴッホ作品の受容と生命力について、そ

の普及に関わる展覧会、出版物や文化という観点から、少し個人的な関心を交え、手短かに付け加えたい。

日本におけるゴッホ受容に関し、雑誌『白樺』の果たした先駆的な役割の重要性については、ガシェ芳名録にも証明されている通りだが、1873年から1876年の間に刊行され、医師ガシェも大きく貢献したフランスの文芸誌『エッチングの 파리』(*Paris à l'eau forte*)と『白樺』の比較対照も、今後興味深い研究対象となってくるのではないだろうか。エディション・シナプスより昨年末に出版された本<sup>1</sup>の解説で、尾本氏が詳しく取り上げているフェリックス・レガメーの弟であるフレデリック・レガメーとリシャール・レクリッドが創刊したこのフランスの文芸誌は、印象派の画家らの新しい芸術を初めて認知し、しばしば詩を伴うエッチングを通してこれを広めた。

ゴッホ作品の受容の背景に関する研究の新たな展望を予感させるガシェ芳名録の内容は、ヨーロッパ、アジア、アメリカの美術史におけるゴッホ作品の生命力というものに絡めて考えられるべきものである。大衆、芸術家だけでなく研究者や学芸員を今なお惹きつけるゴッホの魅力は、近代美術への世界的な視点の多元性を反映、あるいは媒介しているように見える。

オルセー美術館で2011年4月から7月まで開催された大規模なマネ展（「マネ 近代の発明者」展）と同じコンセプトで、その2年前にマルセイユのヴィエイユ・シャリテ美術館で行われたゴッホ展は、ゴッホ作品の起源と複雑さを、過去及び同時代のアーティストとの関係の中で捉えなおすことを目的としたもので、特にプロヴァンス地方の画家で、不当にも評価をあまり得られなかったアルフォンス・モンティセリ（1824-1886）が取り上げられた。同じように、創作過程と画家の概念を考え直そうという目的で、2011年秋に東京の国立新美術館にて「没後120年 ゴッホ展 こうして私はゴッホになった」と題する展覧会が開

催された。作品間の直接的な対話という新たな試みや、埋もれた作品の再評価により、これらの展覧会は単なる回顧展以上のものであり、世界的美術の巨匠らを、彼らの新しさのみならず、他者からの借用、彼らから枝分かれしていった様々な支流について、今日敢えて再考察しようとするものであった。そういった点で近代美術史の新しい傾向を受け継ぐこれらの展覧会はまた、社会的、文化的関係性、傾向、動向の中で受け、与える影響というものを、国境を越えた、比較的で今日的な視点から再検討させるものである。

こうした視点からみると、白樺派の同人らによるゴッホの受容、ゴッホによる浮世絵をはじめとする日本美術の解釈は、その画期的な絵画技法の革新や精神的、知的な憧れという点で、例えば戦後アメリカのアーティストらが、禅思想に基づく日本美術へ関心を抱いたことと比較検証してみる価値がある。1939年にガシェ芳名録に署名し、『ゴッホ・モンドリアン』と題する随想の中でこの二人のオランダ人画家に対する深い敬愛について語った画家・長谷川三郎は、その経歴、目指した理想ともに、国境を越えたこのような関係性や影響力の伝播を非常によく表す例だと言える。ヨーロッパ滞在とゴッホ作品との出会いに深い感銘を受けた長谷川は、日本の美学と近代の抽象芸術を融合させ、戦後のアメリカにおける書道と茶道の受容に大きな役割を果たした。尾本氏も著書の中で述べているように、長谷川は結局アメリカに定住して作品を発表し、California College of Arts and CraftsやサンフランシスコのAmerican Academy of Asian studiesなど様々な教育施設で、学習院大学時代から情熱を注いでいた禅文化や日本の古典美術を教えた。2009年にグッゲンハイム美術館の学芸員、アレクサンドラ・モンローが企画した意欲的な展覧会「The Third Mind: American Artists Contemplate Asia, 1860-1989」は、こうした交流による異文化の浸透のあり方やその内容について取り上げたものであることが思い出

される。

ゴッホ作品の受容の歴史におけるこうした重要な問題をめぐる話の例証として、ヨーロッパ近代美術の日本への普及の立役者の一人で、著者が現在研究の一環として着目する人物、ジョルジュ・サールの言葉と考察を最後に挙げたい。

優秀な東洋学者で、名高い専門誌『アジア美術』(*Arts Asiatiques*)の編集長(1934年)、ギメ美術館学芸員(1941年)を務めたジョルジュ・サールは、ミュゼオグラフィの発展と国内外の美術館同士の学術交流の促進にも活動の場をもった人物である。尾本氏の著書にも登場する著名な美術史家・矢代幸雄とも交流があり、ミュゼ・ド・フランス(国立フランス美術館)総局長として、また国際博物館会議(ICOM)の議長として、フランスの印象派画家、ポスト印象派画家の絵画をとりわけ数多く所有する松方コレクションの寄贈の交渉を主に担ったのが、ジョルジュ・サールであった。この松方コレクションは、周知の通り1959年創設の上野の国立西洋美術館の基となった。エッフェル塔の建設者の孫にあたり、見識あるヒューマニストであったジョルジュ・サールは、より多くの大衆に芸術作品を普及しようとする、近代的美術館の新しい考え方の基礎を築き、それは今日にも引き継がれている。また美術品コレクターとしても知られ、アンドレ・マルローと共に、有名な『人類の美術』(*L'Univers des formes*)コレクションを監修した。友人には多くの芸術家があり、例えば現代美術作品として初めてルーヴル美術館に入ったジョルジュ・ブラックの天井画や、ユネスコ本部のパブロ・ピカソによるフレスコ画とジョアン・ミロの壁画は、サールの後押しがあって導入されたものである。

先にフィガロ紙の記事で触れた、1937年にパレ・ド・トーキョーで開催されたゴッホ回顧展について、ジョルジュ・サールは痛烈にこれを批判した。ルーヴル美術館学芸員で、この回顧展の責任者であったルネ・ユイグによる舞台装飾のよう

な美術と、「作品そのものと、ゴッホ及び彼の芸術の進化に関する資料の一体化」を推し進めることで、「見学者の満足感」を何より重視するために作品の非神聖化を狙ったというその新しい形式を批判し、著書『まなざし』(*Le Regard*) (1939年)の中で、次のように述べている。

「ミュゼオグラフィというものが流行している。堅苦しい名前がつけられているが、1937年にその模範となる展覧会で実演された。会場となったケ・ド・トーキョー(Quai de Tokyo) [現パレ・ド・トーキョー：訳者注]は、学芸員の仕事のイロハを教えるために創意工夫を凝らした、粋な「子供部屋」であった。

(中略)

その典型的な展示が建物2階に繰り広げられていた。例として、ファン・ゴッホの作品が選ばれていた。玄関ホールは文書で埋め尽くされていた。ゴッホが書簡の中に潜ませていた一文が、ダイナミックな言葉の群れと共にポスター用の活字で我々の前に舞っていた。イメージの束が色とりどりのかけらとなってゴッホの生涯、彼の苦悩、労苦、狂気を映し出す一方で、活字体が白黒ではっきりと示され、独自のスタイルを打ち出していた。これを見ながら1911年頃にブラックとピカソが再発明したパピエ・コレを思い出した。それは、部分的に欠けた新聞の見出し、切り取られたページ、散りばめられたアルファベットが調和を生み、判読できる言葉の思いがけない響きがそこかしこに潜んでいるというものだった。偉大な芸術家らの手で、印刷されている紙もいない紙も、創作の素材になったのである。こうした思いがけない発見は、後に広告に利用された。この展覧会では、その模倣が見られた。

我々を教育しようとするこの雑然とした不統一さを見れば、目は十分に驚き、もうこれ以上は何も欲しくなくなる。つまり、続けて解説を読む労力に嫌気がさしてしまうのだ。

短く分断された文章ほど荒唐無稽なものはない。細かく切り込まれた人物ほど判別しづらいものはない。とどのつまり、我々はファン・ゴッホを喧騒の中で見失ってしまったのだ。彼を再び見つけ出すために、彼の全てが存在するところに行こう。彼の絵を見よう。その色彩の轍を辿って行こう。ゴッホという人物が現れてくるはずだ。」

不幸な画家の理想と狂気がしみ込んだ邸宅と風景に惹かれた「日本人巡礼者」たちが、熱狂的にこぞって訪問したオーヴェール・シュール・オワーズに対する反論のように、1937年の威圧的で啓蒙的なパレ・ド・トーキョーのゴッホ回顧展は、1930年代後半にはすでにその約半世紀前から世界的に不動の地位を得ていたこの画家に対し「感情的な」距離を置くことで、新しい評価方法を提案するものであった。尾本氏は、芳名録の初期の巻に記されていた「感情的な言葉」やガシエ家訪問にまつわる物語が、単なる署名のみに取って代わられた第3巻に見られる、こうした変化、相対的な「幻滅」、「非神聖化」について言及している。

フィガロ紙の記者が称賛し、ジョルジュ・サールが批判したような、様々な評価や期待を背負った展覧会、そしてゴッホという人物、作品、人生や、ゴッホの「聖人化」、残された多くの書簡への理解は、ヨーロッパにおいて議論の尽きないひとつの複雑な歴史を物語るものである。ゴッホと日本の関係は、こうした白熱した問題の中心に絡んでくるものであり、このセッションでは、ジョルジュ・サールの言葉を借りれば「画家を喧騒の中に見失う」ことなく、考察と議論を深めることができたのではないだろうか。

最後に、今回「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムの助成を受けて開催された、比較日本学教育研究センター主催第13回国際日本学シンポジウム第2セッションの準備にご協力を

くださった方々に、企画者としてこの場を借りてお礼申し上げたい。絶え間ない援助と貴重なご助言を下された秋山光文先生をはじめ、パネルディスカッションの司会を快く引き受けて下さった天野知香先生、この度のシンポジウムにご協賛いただいたエディション・シナプス社の責任者で、第2セッションにもご参加下さった金子貴彦様、毎年国際シンポジウムのために私の翻訳を補助して下さっている梶浦彩子さん、そして国際日本学教育研究センターの所長、古瀬奈津子先生をはじめ、センターすべての方々、シンポジウムの準備が円滑に進むようアシスタントを務めてくださった矢越葉子さん、大学院生の横田ゆきさん、石本理彩さん、矢野裕香さんに、心から感謝申し上げます。

#### 注

- 1 『フェリックス・レガメー日本関連著作集成』全3巻+別冊解説（日本語）解説：尾本圭子（『ジャポニズムの系譜』第6配本 シリーズ監修：馬淵明子）Edition Synapse, 2010/11